

デンマークにおける公営高齢者（含認知症者）介護型住居・
 デイサービスセンター併設についての報告
 —IFA 会議における訪問見学プログラムから—

○山崎律子、上野 幸、高橋和敏（余暇問題研究所）

キーワード：高齢者介護型住居、IFA、高齢者レクリエーション、統合介護

I はじめに

本報告に至った IFA 会議・・・IFA とは、International Federation on Ageing の省略名で、老年（加齢）を考える国際連盟といわれる国際（NGO）組織である。1992 年に設立された。全世界における高齢者の QOL 向上のための政策や現実を知らせ、教育し、推進する使命をもつ。昨年までは、Yitzhak Brick(イスラエル)が会長であったが、本年デンマークの会議において、Irene Hoskins(アメリカ)夫人が指名された。全世界から 60 カ国以上が参加している。日本からも白石 正昭氏がアクティブに参加し、今年より、穂積 久医師が理事になった。隔年ごとに世界会議が開催されている。今年デンマーク・コペンハーゲンにおいて第 8 回会議が行われた。会議は大別して、経済関係、住宅関係、アクティブ・エイジング・QOL 向上関係、高齢者参加によるメリット関係の多領域にわたる。日本からも 10 数題発表された。その他に高齢者介護関係の訪問見学プログラムがあった。

II 本報告の目的

本報告は、高齢者介護型集合住居の訪問見学より、介護方針と現実を観察した結果の報告、およびデンマークにおける高齢者への対応傾向を考察することを目的とした。

III デンマークの概要

デンマークは、デンマーク王国（Kingdom of Denmark）と称されているように、立憲君主制である。北欧の中で最も南に位置し、国土は、約 4.3 万平方キロメートル（九州とほぼ同面積）の面積を有する。ヨーロッパ大陸と陸続き（ドイツ）のユトランド半島と 500 近い島々からなる。なだらかな地形が続いて、丘陵、森、海岸線などが美しい。人口約 541 万人。（2005 年デンマーク統計年鑑）その首都は、コペンハーゲンである。人口約 50 万人であるが、広域首都圏では約 108 万人（2003 年）という。19 世紀後半から酪農国として、経済的にも発展し、農産物加工、造船、機械・化学工業、美術工芸などを基盤とした近代的工業国となっている。現在、一人当たりの GNP が世界でトップレベルに位置し、先進的な社会保障制度をもつ福祉国家として知られている。

IV デンマークにおける高齢者への対応傾向

その背景・・・デンマークにおける社会保障制度は、租税による保障方式である。この方式は、北欧型として北欧一般にみられる。高齢者福祉においても 1974 年制定の“社会支援法”（1998 年社会サービス法となり、廃止した）や 1987 年の“高齢者住宅法”などが契機となり、その形態を従来の施設ケア中心から、在宅ケア重視への移行が主流となってきた。それは、デンマークそのものの核家族中心の家族形態が大きな要因となった。子どもは親と同居するようなことはなく、親を扶養することはない。加えて女性の社会的役割や高齢者の捉え方の変化も要因となった。すなわち 1970 年代までは、高齢者を半病人扱いにして、日常生活に少し支障があると、プライイェム（日本の特別養護老人ホームに相当する）に入り、医療と介護を受けるに止まっていた。しかし、1970 年代後半以降から、

高齢者は誰からの束縛も命令も受けることなく、自由に自分の時間を使える人生であるがゆえに、老齢期ではあるが、QOLをより高められ得る最も充実した時期として理解されてきた。また1988年から“社会支援法”によって、プライイェムの新設が禁止された。なぜなら、プライイェムは高齢者の真のニーズを無視して一方的に「ケアパッケージ」をサービスするだけで、かえって高齢者の自立を損ない、事実経済的負担が大きすぎるという事態があったからであろう。それらを是正する基本に、高齢者福祉の3原則（1989）が打ち出された。すなわち、継続性、自己決定、自己資源開発などの原則である。

一般的な現状・・・現在、デンマークの高齢者福祉は“統合介護”に代表される。その拠点になっているところは、地域にある“高齢者センター”で、多様な機能を統合した地域高齢者サービスを行っている。具体的には、地域ごとの高齢者センター+高齢者住宅+デイケアセンター（コモンを含む）を目指している。現在は、高齢者住宅、介護型住宅、ケアハウス、プライイェム、グループホーム、プライセンター、アクティビティセンター、配食サービス、ホームヘルプなどあり、多様なサービス機能を果たしている。その結果、プライイェム入居者数やケアハウスも減少傾向にあるという。

V 訪問見学による観察結果

訪問見学対象の概要・・・コペンハーゲン市郊外にある“プライセンター”（かつてはプライイェムとして機能していた施設であったが、改装して介護型集合住宅+デイケアセンターとして現存している）で、認知症者も居住する。総数70アパートメントがあり、その一角にはデイケアセンターも併設されている。介護職員とその他の職員10数名、およびボランティアで運営されている。2階建で中庭もあり、落ち着いた佇まいであった。デイケアセンターでは、レトルトのキッチンとその用具が用意され、内装にも家庭的な配慮がなされていた。

観察結果・・・ちょうど十数人の入居者が集会室で、お茶を飲みながら談笑していた。以下ディレクターの説明と主な観察結果を列挙することにした。

- ・個々のアパートメントは、狭いながらも、個人の家具が持ち込まれ、内装も個人の嗜好が反映されていた。

- ・入居者は、圧倒的に女性が多い。

- ・認知症者の徘徊・無断外出が時々あるが、その事態になると、スタッフが手分けをして探し出して、連れ戻すとのことである。デンマークの安定した国情によるものと考えられる。

- ・全体的に概観すると、要介護入居高齢者も介護スタッフも、ともに“ゆとり”を感じさせた。ごく普通の生活を楽しんでいる様子であった。

VI まとめ

この訪問・見学プログラムは、一瞥ではあるが、レクリエーション関係者に対しても大きな示唆を与えてくれた。すなわち、国状の違いがあるにせよ、ゆとりを感じさせたことは大きな刺激となった。高齢者レクリエーション活動支援に関しても、その置かれた状況によって柔軟に対処する必要を再確認した。現在日本の高齢者福祉においても、制度的には目覚しく進展しているが、名実ともに高齢者のQOLを高められるように期待するところである。

以上